

CONTENTS

はじめに.....

PART I

ワールド・ビジョン援助方針

1. 基本理念(コア・バリュー).....8P
2. ミッション声明文 10P
3. 緊急・復興援助 11P

PART II

阪神・淡路大震災救援活動報告

1. 基本姿勢..... 14P
2. 援助の実際..... 16P
3. 援助実績..... 20P
4. 会計報告..... 26P
5. 救援活動に参加して..... 28P

はじめに

阪神・淡路大震災から一年が過ぎ、公的分野での復旧は急ピッチで進んでいるようです。橋脚が倒壊して寸断されている阪神高速道路神戸線は、今年秋にも全面復旧の見込みが立ち、神戸港のバース（岸壁）も約3分の1が復旧し、営業を再開した企業も多くなりました。しかし、復興の基礎となる住宅の再建は始まったばかりで、被災者用の災害復興公営住宅や公社・公団住宅など約4万戸については、用地確保がまだ5割にとどまっています。兵庫、大阪、京都の被害の状況は、1996年1月10日現在で、死者6,308人、不明2人、負傷者38,495人、全壊した家屋106,247棟、半壊130,334棟となっています。神戸市ではいまだ759人が避難所や待機所で暮らしており、約49,000戸の仮設住宅では約100,000人が不自由な生活を続けています。人々の生活と心の回復にはまだまだ多く時間を必要としています。

すでに、「震災の教訓をどう生かすか」ということで反省や問題提起、各種の提案がなされています。安全な都市づくり、危機管理のあり方、ボランティアを含めた救援体制のあり方や援助の内容と方法について、復興に向けての政府・地方自治体の経済支援のあり方……と指摘されることは広範囲におよんでいます。

ワールド・ビジョン・ジャパンは、開発途上国における開発援助や緊急・復興援助などを支援する団体として活動してきましたので、今回の阪神・淡路大震災は、初めての日本国内での援助活動となりました。そのため、試行錯誤の連続で、全体的視野を持ちつつどれだけきめ細かな活動ができたかは疑問が残ります。しかし、多くの方々からのご支援、ご協力により、私どもが想像した以上の活動を展開できたのではないかと感じています。特に、自分自身も大きな損害を受け、悲嘆の中にありながらも復興に向けて力強く生きようとしていた多くの被災者の方々と共にご奉仕できましたことは、最大の励ましとなりました。

阪神・淡路大震災から一年が経過し、復興のための働きがいよいよ本格化する今、将来に向けて私どもの働きを振り返りまとめておく必要を感じましたので、この報告書を作成することに致しました。

なお、本報告書はⅠ部でワールド・ビジョンの援助活動に対する基本的な理念について、Ⅱ部で阪神・淡路大震災での活動に対する基本的な方針、および具体的な活動報告という形でまとめられています。

ワールド・ビジョン・ジャパン
総 裁 峯 野 龍 弘

ワールド・ビジョンは、国連経済社会理事会に公認・登録されたキリスト教精神に基づく国際的な民間援助機関（NGO）です。ワールド・ビジョン・ジャパンは、日本独自の理事会を持ち、事業計画や予算等を決定して自立した事業を行っていますが、同時に世界100カ国以上で活動している各国のワールド・ビジョンとパートナーシップを築きながら活動しています。

各国のワールド・ビジョンは、それぞれ協力しながらしかも自律的に活動を行っていますが、活動の根本には共通の理念があります。それは「基本理念」（コア・バリュー）とミッション声明文（ミッション・ステートメント）としてまとめられており、世界各国のワールド・ビジョンで共有しています。

1. 基本理念（コア・バリュー）

キリスト教精神に基づく団体として援助事業に対する基本的な理念を述べています。そのなかで、今回の活動に関係するものとしては次のようなものがあります。

(a) 人間を価値あるものとみなす

「私たちはすべての人が神によって創造され、愛されていると信じます。また、金銭、組織、機構、制度よりも人を優先します。」

(b) 人々の必要を理解する

「私たちは一致団結してともに正義を求め、貧しい人々の状況を理解し、...」

(c) 積極的な参加者としてともに働く

「貧しい人々をただ消極的な受益者としてみなすのではなく、積極的な参加者とみなします。なぜならば、私たちは貧しい人々に与えることができるだけでなく、彼らから多くのことを学び受け取ることができるのです。」

「彼らの生活が満たされるよう彼らとともに働くよう努めます。」

(d) 真のパートナーとして互いの自主性を大事にする

「真の協力関係（パートナーシップ）を築くためには、ともに参加すること、目標を分かち合うこと、お互いに責任を持つこと等が必要であることを認めます。私たちは共通の利

益を生み出すために、お互いが依存し、必要であれば喜んで各々の自主性を認めます。」
「仕事に関しては、スタッフの意見を取り入れ、公正かつ効果的な方法で仕事を進めていきます。」

(e)忠実な管理者として、公正かつ効果的に

「私たちは神が創造された物を管理する者たちです。」
「私たちに委ねられている資金は、私たちのものではありません。それは貧しい人々のために用いられるようにと寄付して下さった方々を通して、神から預けられた尊い資金です。私たちはその資金を忠実に目的のために使い、貧しい人々が最大限の恩恵に浴することができるように運用します。」

(f)支援者にも責任を持つ

「ワールド・ビジョンを支援して下さる人々、プロジェクトが行われている地域の人々、政府関係の人々、一般大衆、また各オフィス同士の関係において、常に公正な事実を伝える態度で接します。」
「貧しい人々とも、またワールド・ビジョンを支援して下さっている人々とも、協力関係（パートナーシップ）にあります。」

(g)緊急事態に対処する

「私たちは生命を脅かす緊急事態が発生した場合、適切、かつ必要な援助の手をさしのべます。喜んで知恵を働かせ、危険をおして迅速に行動します。それぞれの状況に応じた適切な判断力と今までの経験を生かして対処します。私たちは危険の渦中にあっても、苦しんでいる人々自身が今までの経験から、何か貢献できると信じています。」

以上の点以外にも「基本理念」の中では、他の団体に対する態度やあり方について、また長期的な開発援助事業について取り組むなど多岐にわたって言及しています。そして「私たちは斬新性、独創性、柔軟性を取り入れることを奨励します。技術面でも理解力においても成長できるようたえず学び、反省し、新しい発見をする態度で対処します。」とあるように、この基本理念を最善をつくして守り、物事の決定の際には基本理念をわきまえつつ、これを行動で表すことを目指しています。

2. ミッション声明文

ワールド・ビジョンが担うべき使命を明記したものが、このミッション声明文（ミッション・ステートメント）です。「主であり、救い主であるイエス・キリストに従い、人々の生活に変化をもたらすために、貧しく、抑圧されている人々とともに働く」ことを使命と考え、そのために「総合的かつ全体的な分野で貢献すること」を目指しています。

具体的には、

(a) 変革をもたらす開発

（特に子供たちの必要に焦点を絞った、コミュニティーを基礎とした持続可能な開発）

(b) 緊急援助

（紛争や災害で困窮した人々への援助）

(c) 正義の追求

（貧しい人々を脅かしている不当な組織が変革されるよう働きかける）

(d) 戦略面でのイニシアティブ

(e) 情報提供

(f) イエス・キリストの証し

（生活、行動などによる証し）

などをあげています。これらの中で、自立のための持続可能な開発援助とともに、緊急・復興援助が私たちの働きを中心にあります。



3. 緊急・復興援助

ワールド・ビジョンでは、過去多くの緊急・復興援助を行ってきました。そして、現在でも世界中のワールド・ビジョンでは、それぞれの地域で数多くの緊急・復興援助事業を行っています。ルワンダ、ソマリア、アンゴラ、モザンビーク、スーダン、ザイールなどのアフリカ諸国をはじめ、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、ラオス、中国、モンゴルなどアジア諸国やハイチなど中南米、また、ボスニア・ヘルツェゴビナやロシア、パレスチナなどの世界のいたるところで起きている緊急事態に対しても活動を展開しています。1994年度、ワールド・ビジョン全体ではこの緊急・復興援助だけでも337プロジェクト、約8,685万ドルを支出しました。

緊急・復興援助を行う場合、実際的な原則があるように思いますが、そのなかのいくつかを取り上げてみましょう。

- (a) 緊急な必要に対応するために迅速かつ効果的な行動をチームで行う。
- (b) 人道的見地からなすべきことを第一に考える。
- (c) 現地の必要を良く把握し、その必要に基づいて援助の内容、優先度を決める。
- (d) 援助する側、される側という関係でなく、対等な関係を築くよう努める。
そのために地元の人々の主体性を尊重し、事業の運営を含めていろいろな面での参加を大切にする。
- (e) 地元の対応能力に基づいて援助活動を行うように努める。
- (f) 援助の対象となる人々と、寄付をしていただく人々の双方に対して責任がある。特に援助金の使途について適切かつ効果的であると同時に、支援者に対してその使途先や使途内容を明確にする。
- (g) 事後の適当な時期に、支援が適正にかつ効果的に行われてたかどうかを評価し、支援者に報告する。

今回の阪神・淡路大震災での緊急・復興援助活動は、上記の基本理念とミッション声明文、およびワールド・ビジョンの過去の経験を土台として行いました。

1. 基本姿勢

1995年1月17日の震災の様子をテレビで知った私たちは、翌18日に東京のワールド・ビジョン・ジャパン本部事務所に「阪神大震災救援対策本部」を設置し、救援活動を開始しました。協議の結果、現地事務所を開設することとなり、19日に2名のスタッフが被災地入りし、西宮市の基督兄弟団西宮教会（小平照夫牧師）をお借りして現地事務所として被災調査を開始しました。そして、ウェスレアン・ホーリネス教会連合の大阪のキリスト東成教会（谷口和男牧師）と和歌山の紀泉台ウェスレーチャペル（今村郁牧師）の支援によって、この2カ所を中継支援事務所といたしました。また、2月初旬からは神戸市中央区にある西日本福音ルーテル教会青谷教会（池上安牧師）の教育館を活動拠点として活動しました。

活動を開始した際、私たちの基本的な姿勢はおおむね以下の4点でした。

- (a)被災地のニーズ（必要）をつかみ、最大限にそれに応答すること。
- (b)地元の主体性を尊重し、復興への自助努力に対して支援すること。
- (c)ワールド・ビジョンとして独自の援助活動を行いつつ、他の団体との情報交換につとめ協力すること。
- (d)状況に応じて移り変わるニーズに対し、柔軟で適切な対応をすること。

このように簡単な基本姿勢を持って活動を開始したのは、状況に柔軟に対処していくためでした。また、私たちはあくまでも外部から来たものであり、外側から支援するもので、主役は地元の人々です。被災者の方々の必要にできるかぎり応えたい、しかし、決して被災者を「弱者」として見るのではなく、ともに働く同労者としてとらえたいと考えたからです。事実、私たちは多くの励ましを被災者の方々から受けることができました。

現地事務所として使用させていただいた西宮教会も青谷教会もともに被災教会であり、地域や会員のために援助の働きをしながら、私どもに協力していただきました。また、当初、淡路島支援のために州本市にある宇山福音教会（村島潔牧師）を支援事務所として活動する予定でしたが、これを始動しなくても淡路島での活動を可能とすることができました。そして海外のワールド・ビジョンや他団体、行政とも協力しながら活動を進めました。このほか、多くの教会、団体、個人の方々とともに活動をさせていただきました。

- ① 1月20日、神戸市役所へ救援物資を運び入れる。
- ② 1月24日、企業の協力により、追加の救援物資を手配。
- ③ 1月27日、湊川公園の救援物資配給所。



Relief



- ④ 1月27日、湊川公園にて救援物資の配布。
- ⑤ 1月26日、岩屋公園にて炊き出しを行う

2. 援助の実際

救援対策本部設置後、東京の本部では現地からの救援要請に対応するために、救援物資の調達を急ぎました。現地事務所では、スタッフやボランティアをチームで派遣し、避難所等での聞き取り調査、行政や他のボランティア団体との協力関係の確立、また支援活動の実施に努めました。

援助活動は、時間の経過に伴って、第一段階緊急援助、第二段階仮設プレハブ援助、第三段階財政援助の大きく3つに分けられます。

第一段階 では、スタッフ、ボランティアが支援者から提供された自転車やオートバイ、車などに乗って各避難所、また避難所に指定されていない被災者のいる公園、各市区役所など担当地域を分けて調査を行い、それに基づく援助活動を行いました。

まず、行政による援助物資の支給がどのように行われているか、特に行政によるケアが届いていない避難所の選定や各避難所などで欠乏している物資を特定し、必要なものをそれを必要とする人々のもとへ届けるために調査を行いました。その段階で、被災者の方々と対話の中で実際の必要を確認できたことは、援助活動を進めるうえでの大きな励みとなるだけでなく、被災者の視点にたった援助を行うために大きな助けとなりました。

援助物資の調達と輸送については、日頃よりワールド・ビジョン・ジャパンを支援してくださっている企業の絶大な協力がありました。その協力により、東京と岐阜などで調達したものをトラックで緊急輸送し、西宮市の救援対策本部で小型トラック等に積みかえ、調査の結果をもとに避難所や公園などで被災者に配布しました。各避難所ごとの物資の仕分け作業や混乱した交通事情のなか、1分でも早く物資を届けるためのルート確定などが必要とされ、早朝から夜遅くまで活動が続けられました。

実際には緊急援助として神戸市によって指定された避難所やそれ以外の避難所、公園などで、食料、水、医療品、生活必需品などすぐに必要なものの配布を行いました。また、ガスが寸断され、温かく、十分な食物を口にできない人々に対して豚汁の焚き出しを行いました。その結果、行政機関が緊急事態に対応しきれない、あるいは援助の手が届きにくい人々への援助ができたように思います。そうしたなか、市や区からの要請を受けて、援助物資を配布した避難所もありました。

そのほか、避難所に指定された神戸市にある中央区立若名小学校に常駐看護婦1名を派遣したり、ボランティアの方々の協力で被災した子供たちを集めてディズニーランドに招待するなど、避難している被災者のためのケアにあたりました。

第二段階

では、施設が破損したために運営に支障をきたしている社会福祉施設、幼稚園、学校、教会等にプレハブを設置しました。

1月下旬にワールド・ビジョン・アメリカから仮設プレハブの用意があるとの連絡が入りました。フロリダにあるプレハブ会社からワールド・ビジョン・アメリカを通して、日本へという購入経路を得ることができました。直接、兵庫県庁への提供を申し出ましたが、当初は外国とは建築基準が違うという理由から外国製プレハブの輸入は認められないとのことでした。しかし、被災地での仮設プレハブの必要が高いことから、独自で提供先を探すことにしました。その後、政府が外国製プレハブの輸入をはじめたことなどから、仮設プレハブ輸入の準備に本格的に取り組むことになりました。

2月上旬から中旬にかけて社会福祉施設や幼稚園、教会などを調査しましたが、ワールド・ビジョン・ジャパンの名前を知らないために話しを聞いてもらえなかったり、混乱の中で今後の計画が立っていないなどの理由で支援を辞退する施設もかなりありました。また、仮設プレハブを希望しても、全壊した建物の撤去がスムーズに行われなかったり、敷地が狭く建てられない、運搬のトラックが入れないなどの問題もあり、決定まで時間を要しました。決定に際しては、支援する施設や諸団体が主体的に復興へ向けての自助努力をし、その計画に合わせて仮設プレハブの提供をすることを基本としました。設置のための建築確認申請の書類作成には、一級建築士の方がボランティアで協力して下さいました。

仮設プレハブ設置工事は3月下旬から5月にかけて行いました。アメリカからの最初の4棟が航空会社の協力で空輸され3月中旬に到着し、アメリカのプレハブ会社からのボランティア技師2名と神戸宣教協力会救援対策本部やYMCAなどのボランティアの協力で設置工事を行いました。アメリカからの船便での輸入に時間のかかることから、急きょ韓国からの購入を決め、4月上旬に韓国へ飛んで韓国製プレハブ8棟を輸入し、韓国から技師8名を招へいして設置工事を行いました。技師は緊急来日のため、2週間の短期ビザで来日し、そのため、厳しい日程のなか、早朝から夜遅くまでの作業により、工事をなんとか完成させることができました。5月に入り、アメリカから船便の仮設プレハブが到着し、再度アメリカからボランティア技師2名が来日して設置工事を行いました。

輸入に際しての免税措置の申請、輸入したものを正確に提供先に届けるためのパーツの仕分けなど困難をきわめた提供先への資材の搬入作業、また、実際の設置作業での外国製のプレハブと日本の建築常識の違いによる基礎工事の混乱など、決してスムーズにいった活動とはいえませんでした。それぞれが初めての経験の連続であったにもかかわらず、工事が完了したということは、多くの方々の協力によって初めて可能となったことができます。

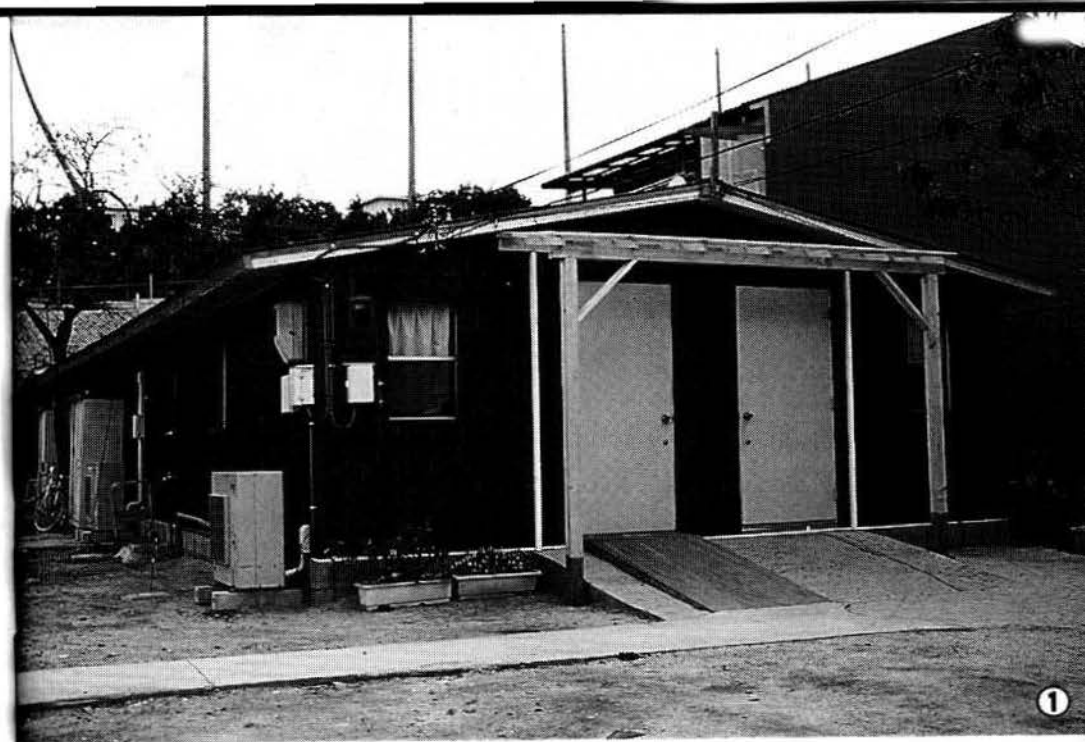
第三段階 では、復興のため被災した施設の改築、補修、再建のための財政的支援と、復興活動を行っている団体への財政支援を通して、地元の人々への援助をしました。

財政援助のための基本方針は次のように考えました。第一に、被害が深刻でほかからの援助を受けにくい施設への支援を行うことです。具体的にはワールド・ビジョン・ジャパンの特徴を考え、子供に関係する施設、社会福祉関係、キリスト教関係の施設、地元のNGO関係等を主な支援先としました。第二に「教会再建のために使ってほしい」等の用途先を指定した募金は、指定通りに使用し、ほかへの流用はしないようにしました。特に指定のないものは、一般の施設への援助としました。これらを、主体性があり復興への自助努力と計画のしっかりしている団体を支援するという、この震災の援助活動の基本姿勢を念頭に置いて行いました。

緊急援助や仮設プレハブ援助を行う過程のなかで、すでにいろいろな団体から財政援助をしてほしいとの依頼がありました。また、それとは別に長田保健所から精神障害をもった方々への支援を行ってほしいとの依頼も受けました。そのほか、地元NGO救援連絡協議会から、この会に属する地元のNGO（民間援助団体）で、在日外国人の人々のために援助活動をしている団体への支援を要請されました。ワールド・ビジョンが開発途上国の人々への支援をしている団体であり、また、社会的に弱い立場の人々への支援を行っていることからそのような団体へも支援することに決めました。

日本内外の教会やクリスチャンの方々から多くの募金をいただきました。それらは教会での礼拝が再開できることを第一として、教会の改修のために使いました。被災の状況、他教会や団体からの支援があるかないか、そして何よりも復興計画を持ち再建に向かって歩もうとしているかどうかを総合的に判断して支援先を決定しました。

福祉施設や教会の建物を建て直す場合は、たとえ一つの施設であっても膨大な費用がかかります。そのため改築費用全額を支援することは困難であり、制限をつけざるを得ないこともありました。被災した施設や教会等、すべてに平等に支援することはできませんでした。また、支援できない団体が多く、私たちの力不足を痛感しました。それでも、少しでも復興への支援ができたことと信じ、その一部となれたことを感謝します。



- ①アメリカ製仮設プレハブ「神戸平安幼稚園」。
- ②被災者のための韓国製住宅用仮設プレハブ。
- ③韓国製仮設プレハブ「兵庫北部幼稚園。」

Rehabilitation



- ④地崩れや建物の修復を援助した「真生乳児院」。
- ⑤全焼した「長田むつみ会」へは活動のための什器備品の購入などを援助
- ⑥財政援助で建設した給食センター「長田ばんばん」。

3. 援助実績

(1) 救援物資の配布

① 救援物資リスト

食 品		
ミネラルウォーター (1.5 リットルボトル)	876箱	7,008本
カップラーメン (4種類)	296箱	7,056個
カップ味噌汁	118箱	7,080個
カップスープ	235箱	7,050個
レトルトご飯 (200g)	176箱	7,040個
缶詰 (魚1)	140箱	7,128個
缶詰 (肉1)	70箱	1,680個
缶詰 (肉2)	130箱	5,400個
缶詰 (ソーセージ/95g)	50箱	4,000個
缶詰 (ソーセージ/90g)	39箱	3,120個
緑茶ティーバッグ (10ヶ入)	118箱	7,080個
りんご	206箱	7,562個
生活用品		
フェイスタオル	59箱	7,000枚
歯ブラシ	4箱	480個
石鹸	180箱	7,020個
トイレットペーパー (4ヶ人)	195箱	3,510個
ティッシュペーパー (箱)	175箱	7,000個
紙皿	6箱	7,200枚
プラスチック・コップ	4箱	8,000個
プラスチック・フォーク	6箱	7,200個
プラスチック・スプーン	6箱	7,200個
おしぼりウェットティッシュ (70枚入)		3,000個
ウェットティッシュ (20ヶ入)	67箱	1,340個
医薬品・衛生用品		
ルル (50粒入)		500個
バファリン (24粒入)		500個
ワカマツ (100粒入)		200個
マキロン (40ml入)		500個
包帯		300個
バンドエイド	38箱	684個
メリーズ (紙おむつ) M		500個
L		500個
ロリエ (生理用品26ヶ入)		3,000個
サリバン (大人用紙おむつ 30枚入) M		300個

衣類

男性用下着・長袖シャツ	M	23箱	1,800枚
	L	22箱	1,700枚
男性用下着・長ズボン下	M	23箱	1,800枚
	L	22箱	1,700枚
男性用下着・ブリーフ	M	8箱	1,800枚
	L	8箱	1,700枚
女性用下着・長袖スリーマ	M	18箱	1,800枚
	L	17箱	1,700枚
女性用下着・長スラックス	M	20箱	1,800枚
	L	19箱	1,700枚
女性用下着・ショーツ	M	10箱	2,000枚
	L	13箱	1,500枚

そのほか

ビニールシート		50箱	500枚
テント（レイクサイドキャビン）			40個
シュラフ（寝袋）			100個
アライATマットLL			100個
ロープ（三信ビニロン 300m）			14巻
エスピット・ポケットストーブ（固形燃料）			73個
ホワイトベアー160（固形燃料）			102個
ホワイトベアー400（固形燃料）			51個
ホワイトベアー600（固形燃料）			21個
スイスメタンザ（固形燃料）			240個
ポリバケツ（13ℓ）本体		24箱	500個
蓋		23箱	500個
軍手		11箱	7,080組
レインコート			120個
ポケットコート			500個
乾電池（単1）		10箱	1,000個
乾電池（単2）		5箱	1,000個
乾電池（単3）		5箱	2,000個
ミスターホット（10ヶ入）			1,440個
ぬくっこ（10ヶ入）			1,560個
プラスチック・バッグ（WV名入）			30,000枚
防塵マスク			2,000個

●企業及び団体、個人からの提供品

ヤマザキ・ナビスコリッツクラッカー	104,000箱	312,000食
コンピューター		1台
携帯無線		2台
炊き出し用材料		
ホッカイロ		多数
自転車		5台
防塵服		200枚
ぬいぐるみ		約 800個
点字絵本		30冊

②救援物資配給先

兵庫県、神戸市、長田区、兵庫区等関係行政機関と連絡をとりつつ、ワールド・ビジョン・ジャパンも独自に58カ所の避難所を訪問し、ニーズ調査を行い、以下のように救援物資の配布を行った。

神戸市中央区

北野小学校(中山手通)	筒井台小学校(野崎通)	上筒井小学校(野崎通)
葺合高校(野崎通)	二宮小学校(二宮町)	神戸中華同文学校(中山手通)
北本集会所(北本町通)	葺合文化センター(旗塚通)	

神戸市灘区

岩屋公園(岩屋中町)	鷹匠中学校(高德町)	
福住小学校(福住通)	稗田小学校(岸地通)	岩屋児童公園(東南)

神戸市東灘区

御影教会(御影町)

芦屋市

精道幼稚園(川西町)	精道小学校(精道町)
------------	------------

西宮市

住江公園(津門住江町)	五月ヶ原の近辺	ロイヤルハイム
西宮教会(染殿町)	YMCA(神楽町)	西宮市役所(六湛寺町)
上ヶ原公民館(六軒町)	上ヶ原南小学校(上ヶ原)	アーバンライフ(満池谷町)

このほか、長田区役所からの依頼により、援助物資が届きにくい長田区内の小さな避難所18カ所に対して食料、日用品等の配布を行った。

③ 救援物資提供先

救援物資供給の要請をしてきた救援活動をする諸団体に対し、救援物資の提供を行った。

湊川伝道館(神戸市兵庫区) キリスト教神戸宣教協力会救援対策本部(神戸市垂水区)
日本国際飢餓対策機構

(2) 炊き出し

1月26日～27日の2日間にわたり、延べ5200人に豚汁の炊き出し、また日用品、医薬品の配給を行った。

湊川公園(神戸市兵庫区) 岩屋公園(神戸市灘区)

(3) 看護婦の派遣

避難所になっている神戸市中央区若名小学校に常駐のボランティア看護婦を派遣した。

(4) 子供のケア

3月から4月にぬいぐるみ約800個をボランティアが行った子供会などで配布した。また、企業・諸団体の協力を得て、4月3日～4日の2日間、被災した47名の子供と3名の引率者を「阪神っ子ディズニーランド・ツアー」に招待した。

(5) 点字絵本の配布

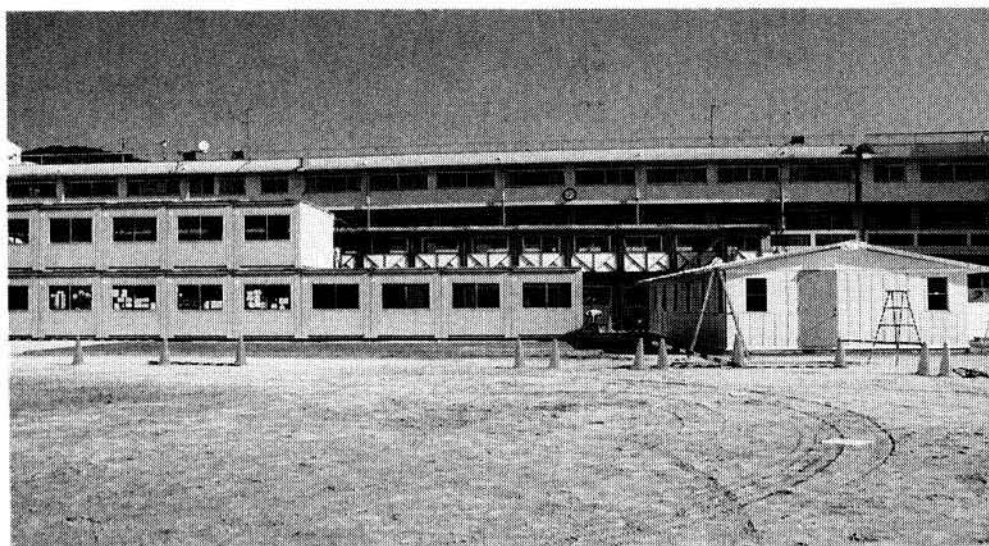
ディック・ブルーナーの点字絵本「うさこちゃんとうみ」30冊を配布した。

西宮公会堂障害児者情報センター 関西盲人ホーム
西宮中央点訳グループ 日本盲人キリスト教伝道協議会

(6) 仮設プレハブ援助

名称	棟数	用途	輸入先
神戸平安幼稚園（神戸市兵庫区）	2棟	幼稚園	アメリカ
聖ペテロ幼稚園（西宮市）	1棟	幼稚園	アメリカ
志筑教会付属幼稚園（津名郡津名町）	1棟	幼稚園	アメリカ
兵庫北部幼稚園（神戸市兵庫区）	1棟	幼稚園	韓国
マリスト国際学校（神戸市須磨区）	2棟	学校	アメリカ
神戸少年の家（神戸市垂水区）	1棟	養護施設	アメリカ
聖ヨハネ寮（神戸市須磨区）	1棟	養護施設	韓国
母の家ベテル（神戸市灘区）	1棟	養護施設	韓国
神和教会（神戸市東灘区）	1棟	礼拝堂	アメリカ
住宅（神戸市垂水区）	4棟	住宅	韓国

※神戸フィラデルフィア教会（神戸市灘区）に韓国製プレハブ1棟を斡旋した。



アメリカ製プレハブを設置した「マリスト国際学校」。
校舎は地割れのため、建物にも亀裂が入り使用できない。

(7) 財政援助

名称	施設概要	援助内容
長田ばんばん（長田区）	高齢者等への給食サービス	建設費
長田むつみ会（長田区）	福祉作業所	什器備品購入費
ハート・ワーキング・クラブ（長田区）	福祉作業所	建設内装工事費
子供の家（尼崎市）	養護施設	暖房器具購入費
真生乳児院（中央区）	乳児院	建物修復費
須磨神愛母子寮（須磨区）	母子寮	外壁修復費
仁愛幼稚園（中央区）	幼稚園	建物修復費
日本イエス・キリスト教団諸教会	教会	建物再建・修復費
宝塚福音教会（宝塚市）	教会	音響整備費
聖愛コミュニティーセンター（西宮市）	コミュニティーセンター	建物修復費
阪神復興ミニストリー（西宮市）	ボランティア活動	活動費
外国人救援ネット（中央区）	在日外国人電話相談	活動費
多文化共生センター（大阪市中央区）	在日外国人交流・相談	活動費
兵庫県定住外国人生活復興センター（長田区）	在日外国人相談	活動費
コミュニティFM放送局『エフエムわいわい』（長田区）	多言語情報提供	活動費

4. 会計報告 (1995年1月18日から1996年3月31日まで)

1995年1月18日から9月30日までの阪神・淡路大震災収支に関しては、ワールド・ビジョン・ジャパン1995年度決算報告書(1994年10月1日から1995年9月30日まで)として11月30日に公認会計士の監査を受けています。

I 収入の部 (1996年3月31日現在)

1. 阪神・淡路大震災募金収入		
1995年1月	2,296,235円	
2月	36,777,085円	
3月	11,502,600円	
4月	48,290,037円 *	
5月	1,502,552円	
6月	569,940円	
7月	712,123円	
8月	444,667円	
9月	3,086,500円 ※	
10月	47,820円	
11月	1,045,540円 *	
12月	236,500円	
1996年1月	6,236,287円 *	
2月	117,381円	
3月	13,000円	112,878,267円
2. ワールド・ビジョン・パートナーからの支援金		
ワールド・ビジョン・アメリカ		
ワールド・ビジョン・オーストラリア		
ワールド・ビジョン・カナダ		
ワールド・ビジョン・韓国		
ワールド・ビジョン・台湾		
ワールド・ビジョン・香港		38,741,833円
合 計 (a)		151,620,100円

※ '95ファミン30阪神・淡路大震災募金含む * ラブローフ募金含む

(注) 企業・団体からの物資提供分は含まない

Ⅱ 支出の部 (1996年 3 月31日現在)

1. 緊急援助		30,479,405円
2. 仮設プレハブ援助		44,704,603円
3. 財政援助		70,032,468円
4. 事業管理費		
滞在費	1,101,444円	
交通費	2,374,516円	
通信費	746,455円	
雑費	1,258,157円 ※	
		5,480,572円
合 計 (b)		150,697,048円

※バイク／携帯電話／電気ストーブ／バイク・自転車の修理／文具／写真費等

Ⅲ 残金 (1996年 3 月31日現在)

残 金 [収入合計 (a) - 支出合計 (b)]	923,052円
-----------------------------	----------

残金の使用についてはその全額を援助、および事業管理費としての使用予定有り

5. 救援活動に参加して

「すべての人々に何もかもはできなくとも、
誰かに何かはできる」

ワールド・ビジョン・ジャパンスタッフ 池田満豊

震災2日後、現地入りしてこの目に飛び込んできた光景は、無残にも崩れ落ちた高速道路の高架、倒壊したビルや民家の間を縫うようにして今日生きるための糧を求めて走る自動車の列。さらに印象的だったことは、近代都市がこんなにももろいものだったのかという怖さと、それにも増して人間はこんなにも無表情になれるものかという驚きでした。

被害は報道で目にし耳にした以上に大きく、ワールド・ビジョン・ジャパンという一NGOに一体何ができるのかという不安を隠せませんでした。実際、緊急支援から復興支援の一連の活動を体験した者として、この支援活動が一体どれだけ人々のために役立っているのだろうかという、じりじりと迫ってくるような焦燥感との戦いが心の中でいつも繰り返されていたことは事実でした。

それは、建物が壊れたといった種の時間をかければ復興可能であることの一方で、被災された方一人ひとりの悲しみと傷は、外部から来た自分にはとうてい理解できず、癒すことができないほど深いものであるという焦りからくるものでもありました。

この期間さまざまな方々と話をし、それぞれの抱える不安、悲しみ、怒り、喜びを分かち合いました。援助物資をお届けした学校にいた、目の不自由な娘さんとともに避難していたお母さん。やっと娘さんが職業訓練を終えて、仕事を始めた矢先の地震。娘さんは職を失い慣れ親しんだ街も様子が変わり、家の中でさえも危険で一人で行動することができなくなってしまいました。お話を聞き終わり写真を撮らせてもらおうとした時、娘さんがひどく怒りました。彼女の惨めな姿を写真にするということは、彼女のプライドをひどく傷つける行為だったのかもしれませんが、これはひとつの例に過ぎませんが、支援活動を被災者の方々と共に進めるなかで、このような人びとの悲しみに触れることや、逆に共に一つのことをやり遂げた喜びなど、本当にさまざまなこととを体験させていただきました。そして、それは自分がどのような姿勢で人びとと接しているのかということが問われる時でもありました。

大きすぎる被災状況の前に押しつぶされそうな毎日でありましたが、ひとつ気づかされたことがあります。ワールド・ビジョンの創始者ボブ・ピアスは「すべての人々に何もかもはできなくとも、誰かに何かはできる」と言っています。支援活動の対象を被災者という漠然とした対象としてとらえるのではなく、目の前にいる一人の人に対して手をさしのべ協力していくという時、いつも心を支配していた焦りが取り除かれました。

一人ひとりとの出会いを大切に、愛をそそいでいくこと。これが支援活動を進めていくなかで求められていることであると痛感させられました。



神戸ボランティア活動

山内義実（会社員）

神戸という街は私にとって非常になじみのある街でした。三宮に住んでいた父方の祖父母を始め幾人かの親戚が住んでおり、岡山で生まれ育った私は幼い頃からよく出かけていき、思い出に残る街でありました。「神戸に行けるものなら行きたい、神戸に行って被災者の助けになりたい」という思いが強くなっていたその時、ワールド・ビジョン・ジャパンとして神戸に行くという情報を聞き、私はもう行くしかないと決めました。ワールド・ビジョン・ジャパンの足手まといになるかもしれないという思いはありましたが、その日、早速神戸行きに同行させてほしいと依頼しました。

1月23日（月）の朝、東京を発ちました。その時の報道では、少し落ち着きを戻しつつあるようなことが伝えられ始めたころであり、遅すぎる神戸入りではないかと少し思っていました。しかしそれは間違いだったと気づくには時間はかかりませんでした。西宮に着いた当日夕方から、持ってきた自転車にまたがり、国道2号線沿いの変貌した街並みを見ながら、東灘区の避難所まで足を運び、状況と要望を聞いて廻りました。そこで「地震から1週間たっても何も変わっていない」という、報道では伝わらない避難所の現状を見ました。連日の打合わせや荷物の仕分け等で、

睡眠時間も十分にとれない状況でした。当然その間風呂には入っていませんが、私の場合「この何日間だけ」という期間がはっきりしていたため覚悟もできましたし、東京に戻れば狭いながらも「我が家」があるという身でありました。それに対し、終わりの見えない避難所生活を強いられ、帰る家のない被災者の心労を思うと、果して彼らのために本当の意味で支援が出来たのだろうかと考えざるを得ませんでした。ただ、少しでも同じ状況を体験し、共有することで被災者の気持ちを少しでも理解することはできたのだらうと思います。

終わってみれば非常に短い5日間でした。金曜の夜、借りた4トントラックでもう一人のボランティアと一緒に陸路東京へ帰ってきたのですが、どのように自分が運転してきたのかあまり覚えていません。とにかく眠たかったのです。私は今回のような組織的なボランティア活動、しかも実際に体を動かしてのボランティア活動をしたことはありませんでした。この経験を生かし、もっと行動を伴う積極的な支援をしたいと思いましたし、またやればできることも分かりました。

会社にはボランティア休暇の打診はしたものの、とりあえず有給休暇を使っただけで神戸行きでした。帰ってみると、ボランティア休暇の適用が決まっていた。異例のスピード決済でした。この震災に対する企業のボランティア支援が注目されつつある時期であったことも要因であったと思います。ワールド・ビジョン・ジャパンとの関わりがなければ私も神戸に行かなかったかもしれません。被災者に対する心からの支援は自尊心や利己心からではなく、「愛」から出てくる犠牲的なものでなければ、意味があまりないということをこの活動を通して感じました。

去年の暮、岡山に帰郷する際に再び神戸の街を訪れました。そこには、がれきが片づいた空き地が広がっており、徐々に新しい建築物が建ちつつありました。あの神戸が物質的にも精神的にも本当の意味で復興するまでしばらく見つけたいと思います。



聖ペテロ幼稚園にて。



① 救援活動をするワールド・ビジョン・ジャパンのスタッフ。
② 神戸市立福住小学校へ救援物資を届ける。



Volunteers



③ 神和教会で働くボランティアの方々。
④ 神戸平安幼稚園で来日したアメリカ人ボランティア技師。



⑤ ボランティアによって企画された「阪神っ子ディズニーランドツアー」。

ワールド・ビジョン・ジャパンは、国連経済社会理事会に公認・登録されたキリスト教精神に基づく国際的な民間援助機関（NGO）「ワールド・ビジョン」を構成する日本の民間援助機関です。貧しく抑圧された人々の生活に変化をもたらすために、彼らとともに正義を追求し、地域開発や緊急援助など様々な支援活動を進めています。

阪神・淡路大震災救援活動報告書

1996年4月15日発行

編集・発行 **ワールド・ビジョン・ジャパン**

〒169 東京都新宿区百人町1-18-10 太陽堂ビル2F

TEL. 03-3367-7251 FAX. 03-3367-7652

郵便振替 00130-6-254059

印刷 **ペーテルフォト印刷株式会社**

※本書の一部または全部を無断で複写、転載引用することを固く禁じます。